

「荒ぶる荒川に荒ブラ団あり!？」 荒川クリーンエイドこれまでの30年、これからの30年」

特定非営利活動法人 荒川クリーンエイド・フォーラム (東京都)

1. 背景

当団体は、1994年に建設省荒川下流工事事務所（現・国土交通省荒川下流河川事務所）および沿川自治体（戸田市、川口市、板橋区、北区、足立区、葛飾区、墨田区、江戸川区、江東区）が中心だが荒川上流部分の荒川上流河川事務所および自治体の協力も得られている）との協働により活動を開始し、荒川流域において「調べるごみ拾い」を持続的に展開してきた。当該活動は、河川環境の改善に寄与するのみならず、市民の環境意識の向上を促し、企業・行政・教育機関との協働を促進するプラットフォームの構築にも貢献している。本稿では、特に2011年の国土交通大臣賞受賞後の取り組みについて概説する。

本活動は、過去30年間に延べ26万人が参加し、近年では年間200回以上の河川清掃活動が荒川河川敷において実施されている（ただし、コロナウイルス2019感染症拡大期を除く）。本活動は単なる清掃活動にとどまらず、環境教育および啓発活動の推進、さらに企業や自治体との連携を通じた持続可能な社会の実現にも寄与している。特に、企業の社会貢献活動の場としての荒川河川敷の活用を促進するとともに、産学官民の協働による新たな環境保全施策を推進し、環境

問題に対する意識変革を図ってきた。さらに、本活動を環境保全モデルとして位置づけ、都市河川における清掃活動と生物多様性の保全の両立を目指している。



図2 荒川クリーンエイド・フォーラムのビジョン、ミッション、コアバリュー



写真1 荒川河口の河川ごみの漂着/堆積状況



図1 荒川ブラックスーツ団とは一体何者なのか？

荒川ブラックスーツ団はコロナウイルス2019が拡大していた当時、フィールドワークが99% OFFになり、時間的余裕ができた際に生まれたキャラクター。YouTubeなどのSNSで河川/海洋ごみ問題や生物多様性等について発信している。無関心からの脱却を図るツールとなっている。

2. 活動概要

以下に活動概要を整理した。

2.1 ごみ削減と生態系保全

- ・30年間の活動を通じて、荒川に漂着する人工系ごみを除去し、水辺環境の改善に貢献。
- ・荒川下流河川事務所の試算によると、ごみ削減効果額は年間約2千万円。
- ・干潟環境の保全活動を行い、トビハゼなどの希少生物の生息環境を維持。
- ・外来植物の除去活動を進め、地域固有の生態系を保護。

2.2 社会への影響と参加者の増加

- ・企業の社会貢献活動の場としての認知が広がり、2023年には74社が活動（図3）。
- ・高齢化が進む市民団体の活動を企業活動が補完し、

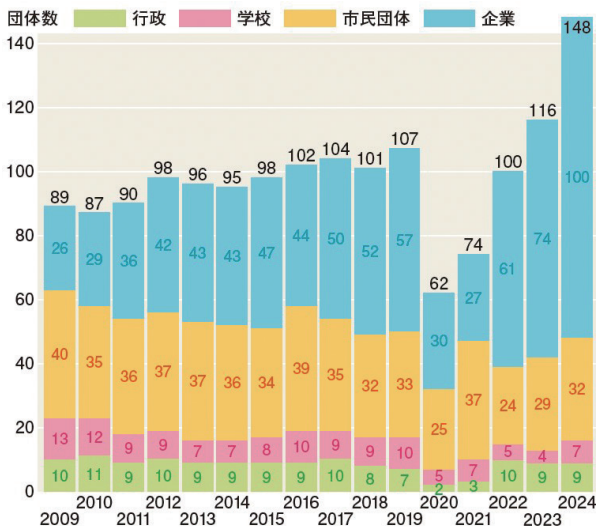


図3 セクター別荒川清掃参加組織



写真2 立教サービスマーケティングによる社会課題河川/海洋ごみ問題体験。授業では荒川下流河川事務所の協力により流域治水など河川管理行政についても学べる内容も含まれている。写真は荒川下流河川事務所長によるレクチャー。

持続可能な取り組みを確立。

- ・学生向けの体験学習プログラム（立教大学サービスマーケティングなど）を通じて次世代の環境リーダーを育成（写真2）。
- ・地域住民への環境意識啓発の一環として、環境教育イベントやワークショップを開催。

2.3 新たな広報活動と意識啓発

以下に概要を整理した。

- ・「荒川ブラックスーツ団」といったキャラクターを設定し、YouTubeなどのSNSを通じた啓発活動を展開（(株) JUNESEP協働）（図4）。
- ・河川ごみ問題をテーマとしたスマホアプリ「FLOAT」を開発し、社会実験として広告視聴によるごみ回収という試みを展開（助成：Rethink Project、アプリ制作協働：OLTVECTS）。
- ・「あらくりんくん」という走る広告塔を活用し、移動するだけで広報活動を実施（寄付：UPS基金、デザイン協力：認定NPO法人あっちこっち）（写真3）。
- ・企業とのコラボレーションによるプロモーション活動を推進し、環境保全の重要性を広める。



図4 荒川ブラックスーツ団によるメッセージ性の強いリーフレット（デザイン：永野 武宏）
漫画調のデザインに変更したことで、問合せやイベント出演依頼などが増えることとなった。



写真3 あらくりくん号が河川敷を走るだけで広報活動になる。

3. 今後の展望

以下に概要を整理した。

1. 活動の拡大と横展開

- ・ 2030年までに活動件数を倍増させる目標を設定。
- ・ 「荒川モデル（産官学民協働持続方式）」として、荒川流域外の河川にも技術やノウハウを移転（例：淀川への展開）。
- ・ 地域ごとの特性に応じた清掃活動や環境教育プログラムを開発し、全国へ展開。

2. 企業・教育機関とのさらなる連携強化

- ・ 企業向けの社会貢献活動メニューを充実させ、SDGsやESG活動の一環として取り組める体制を整備。
- ・ 学生の受け入れ体制を強化し、教育機関と連携した環境学習プログラムを拡充。
- ・ 企業と大学の共同研究を促進し、環境保全の新たなアプローチを開発。

3. 持続可能な活動基盤の構築

- ・ 若手の育成を推進し、組織の世代交代をさらに進める。
- ・ 賛同企業・団体の拡充を図り、安定的な財政基盤を確保。
- ・ ボランティア活動のさらなる拡充を図り、多様な参加者が関われる仕組みを作る。

4. おわりに

荒川における河川ごみ問題は解決には至っておらず、より多くの人々の関心を喚起し、共に行動することが求められている。河川におけるごみの回収活動は対症療法的な側面が強いものの、統計的に見れば、自然環境に流出するごみを完全にゼロにすることは極めて困難である。また、既に自然環境へ流出してしまったごみは現存しており、一定量のごみが今後も発生し続けることが予想されるため、それらを早期回収することが不可欠である。さらに、河川および海洋ごみの問題は越境問題であり、グローバルな視点に基づいた対策が必要である。

日本のプラスチックごみのリサイクル率は熱回収を含め（有効利用率）80%以上とも言われており*、人口当たりの河川・海洋ごみの排出量は国際的に見ても比較的少ないと考えられる。しかし、国内における使い捨てプラスチック削減の推進に加え、「荒川クリーンエイド」のような取り組みをベストプラクティスとして技術移転することが、国内のみならず国際的な海洋ごみ削減に寄与すると考えられる。「荒川クリーンエイド」は端的に言えば「ごみを拾う人を増やし、捨てる人を減らす」ことを目的とした活動であり、この仕組みをどのように拡大・発展させていくべきかについては、まだ途上にある。

参考

2023年プラスチック製品の生産・廃棄・再資源化・処理処分の状況マテリアルフロー図、（一社）プラスチック循環利用協会、2023

特定非営利活動法人
荒川クリーンエイド・フォーラム（東京都）